

本因坊秀和（1820－1873）

文政三年、伊豆小下田に生まれる。本姓土屋氏、幼名は俊平、のちに恒太郎。

9歳のときに本因坊丈和の弟子となり、十三歳で剃髪して秀和と改名。十五歳二段、十七歳五段、十九歳六段。天保十一年（1840）、二十一歳の若さで七段を許され、十三世丈策の跡目に立てられた。丈策は元丈の子、順送りで十三世本因坊についた。

棋力はなかったが、坊家随一の碩学と讃えられ、林元美と並び称され、事務や交渉事に長けていた。秀和には丈和の長男、戸谷梅太郎という同年の好敵手がいた。実力は拮抗し五段までは同時に昇級していたが、眼病をわずらい脱落する。梅太郎は十五歳で道和、のちに還俗して葛野忠左衛門、水谷家に入り順策、そして十一世井上因碩（幻庵）に乞われて井上秀徹と改名し、十二世を継ぐ。引退後は節山を名乗る。名人碁所へのあくなき執着をみせた幻庵因碩は、二十二歳下の秀和との四番碁の機会を得た。二勝二敗の打ち分けならばよしとしていた。つまり、七段を相手に打ちわけは九段の芸、すなわち名人碁所の資格充分ということになる。争碁第一局のあと、因碩は体調を崩してしまい、継続不可となり碁所願も取り下げられた。一年半後に因碩は再び立ったが六目負けた。名人碁所再提出のきっかけをつかむ事ができなかった。縁居の身分の丈和は「因碩は名人の所作だが、惜しいかなその時を得なかった」と評している。

弘化四年（1847）に丈策、丈和と相次いで死去し、秀和は八段に昇級、十四世本因坊を継いだ。跡目には九歳下の桑原秀策が選ばれた。後年、名人の技量を持ちながら準名人（八段）にとどまった、秀和、本因坊元丈、安井知得、幻庵因碩の四人は敬意をもって囲碁四哲とよばれた。また同時代の、伊藤松和、坂口仙得、大田雄蔵、安井算知は天保四傑と呼ばれ、秀和、秀策と数多くの譜を残した。幕末になり国内外の対応に多忙を極めていた、そして碁どころじゃなかった。さらに秀和にとって不運だったのは、役人との折衝や文書の作成など、こういう際に必要な実務を任せられる人材がいなかった。十年以上たつてやっと碁所願を出したが、松本錦四郎こと十三世井上因碩が異議を申し立てた。そして二年後文久元年のお城碁で秀和は錦四郎に一目負けを喫し、名人碁所を断念せざるを得なくなったのは不運というよりない。秀和は名人を断念せざるを得なくなり翌年には跡目秀策を失い極みつけは御城碁の廃止・・・これは家元四家にとって存続の危機につながる大事件だった。家禄も五十石から十三石まで減らされ本所相生町の屋敷も没収された。借家が火元の大火事で全焼し、焼け残った倉庫で雨露をしのぐ有様だった。見かねた坊門の先輩伊藤松和が移り先を紹介してくれたが、火元となった自分達だけ出て行くのは申し訳ない、と秀和は感謝しつつも断った。不運続きの晩年。しかし秀和は偉大な功績を残した。秀策、秀甫、実子の秀栄をはじめとする、明治以後の中心となる棋士を育てた事である。近代囲碁が秀和から始まったといわれる所以である。明治六年秀和は五十四歳の波乱に満ちた生涯を終え、本郷丸山本妙寺に葬られた。（完）